

ドナウ通信

No. 49

目次

走行中の車を狙った強盗に注意 「ドナウ通信」編集部	2
車を狙った強盗事件（事例一・事例二）	4
ピンテル内務大臣への要請書 ブダペスト日本商工会幹事 宮崎 元一郎	7
日本人会より「運動会・ソフトボール&ソフトバレーボール大会」	8
補習校児童作文 はんまー たろう/し水 ようすけ/ブランド エリック 岩谷 麻里/吉原 翼/コズマ ロバート/大河内 薫子 室本 一樹/上原 彩香	10
随想「一九六〇年代のハンガリーと日本」 川合 智司	15
ハンガリー天才列伝（その七） 「ジョージ・ソロス」 マルクス・ジョルジュ	23
『異星人伝説- 20世紀を作ったハンガリー人』 Genius Loci 訳者前書きより	31
大使館からのお知らせ	32

走行中の車を狙った

強盗に注意

「ドナウ通信」編集部

最近、車を狙った強盗（未遂）事件が頻発しています。これは走行中の車（外人の運転で、一人の場合が狙われやすい）に接近して、行き先を聞く振りをしてタイヤをパンクさせ、パンク修理を手伝う振りをして金銭を強奪したり、あるいは車そのものを強奪しようとする犯罪です。外人だけでなく、ハンガリー人も被害に遭っており、テレビでも特集が組まれています。車を故意にぶつけて強盗を働く手口もあり、ウクライナマフィアの仕業だとも報告されています。

犯行者は男性二人連れの場合が多く、ベントツやアウデイの車を使い、

狙った車を追跡します。場合によっては、二台の車で挟み撃ちにすることもあります。必ずしもハンガリーナンバーでの犯行とは限らず、男性二人乗りのドイツナンバー車にも注意しなければなりません。夜間で一人で走行中の車を狙うことが多いようですが、ウィーン線の高速道路でも二台が組になった車が、狙った車を停車させ、金銭を強奪する事件が発生しています。狙いは金銭のようですが、高級車の場合には、車そのものの強奪を目的としている場合があります。

犯行者はタイヤを切るためのナイフをもっており、さらにスタンガンや別の凶器を持っていることが予想されます。したがって、この種の事件に遭遇した場合、大胆かつ慎重に行動する必要があります。いくつかの留意点を列挙します。

一・予防措置

車を目立つ所に長時間駐車させない。空港駐車上に車を置いて出張することはもちろん、街中の路地に長時間駐車すること、さらに家の前であつても長時間車を放置しない。市内では可能な限り、ホテルの駐車場を利用する。

二・走行中の注意

夜間、背後の車を時々注意し、男性二人乗りの車が後を付けていないか注意する。

追跡に気づいたら、身分証明書、貴重品を身につけ、座席や車内ボックスに放置しない。

信号停車中に話し掛けられた場合、絶対に車外にでず、窓を少しだけ開けて対応する。

どうしても停車が不可欠な状況になった場合、追跡車から可能限

り距離をとって停車し、常に発進可能な状態にしておく。

三・追跡された場合

携帯で連絡をとれる現地スタッフを決めておき、警察への連絡を頼み、応援を依頼する。その際、どこを走行しているのか、道路を良く注意し、正確な場所を伝え、どこか逃げ込む場所を伝える。たとえば、五つ星のホテルの玄関あるいは駐車場に入る。あるいは、地区の警察署の場所が分かっている場合には、その玄関につける。

追跡を振り切れない場合、照明が明るいガソリンスタンドの店の玄関につけ、スタッフに警察を呼ぶように頼む。あるいは、応援が来るまでそこで待機する。ガソリンスタンドでも、客が往来する玄関につけ、店から離れた駐車場に停車しない。

家まで追跡させない。家の場所を知られると、再度、狙われる可

能性がある。

警察官が常時警備している場所は、アメリカ大使館（国立銀行裏）、アメリカ大使公邸（十二区リフト横）、英国大使館前（寿司庵横）である。日本の警察署と違い、夜間の警察署は鍵が締まっている場合が多く、警察署に入っても、すぐに対応できない場合が多い。それよりは、車から携帯で警察に通報し、パトカーの応援を求める方が良い。

四・ぶつけられた場合、

逃げられなくなった場合

ぶつけられた場合、必ず警察に連絡する（一〇七番）。通りの名前を伝えることが必要。しかし、パトカーがすぐに来ることは稀なので、かすり傷程度の場合には、車から降りることなく、その場から目標まで車を進める。

パンクされても降りることなく、とにかく近くのガソリンスタンドか、ホテルの玄関につける。

絶対にパンク修理を手伝わせない。ガソリンスタンドかホテルの駐車場で、ゆっくりタイヤを交換する。

完全に挟まれて逃げられなくなった場合、幾ら欲しいのか切り出す。最近、ウイーンからブダペストに向かっていた中国人家族（レストラン弁慶の店主）は、二台の車に挟まれて動けなくなり、三千シリングで解放してもらったという事件に遭遇している。抵抗した場合に、凶器を使う可能性があるため、まず金銭的な要求を聞く。

五・事前の予備知識

事件に備えて、万一の場合の連絡体制を社会で考えておく。対応する現地スタッフを明確にしておく。

ブダペスト市内の主要な道路の名前を知っておくこと。最低、主要な建物を目印に、走行場所が分かるようにする。

ハンガリーの警察署は分かりにくいのが、よく通る経路に一番近い警察署を確認しておくこと。

ホテルに逃げ込む場合には、ポーターが常に監視している五つ星ホテルへ。駐車場はインターコンチヤマリオート、ケンピンスキーなど。

六・警察への通報

当地の警察署はあまり頼りにできないが、追跡した車のプレートナンバーや人相などをチェックし、警察に通報する。通報は、現地スタッフに頼む。いくつかの事例を付して、日本人会および商工会名で内務大臣に事件を周知させ、対策をとるよう依頼する。

車を狙った強盗事件

(事例一)

日時・場所

七月二十八日(土)、午後一〇時～一時

ブダペスト市内、空港から自宅(二区)までの道中

遭遇内容・経過

出張から戻り、空港の駐車場から市内へのバイパスを抜け、EötvösとEszterútの交差点(右手奥に、ウエンディーズとOMVがありま)す)で信号待ちをしている時、黒塗りのベンツ(SEシリーズ)が左側に停車し、運転手がフロントライトをチェックしに降りてきました。そのベンツのライトは異常はないのですが、いきなりハンガリー語で話しかけられ、私は理解できず、窓を閉じたまま、無視しました。運転手は、次に彼の前に停車していたロー

バー(75型)に行き、同じように話しかけていました。

信号が青に変わったので、発車し、家路に急ぐようしました。この時、動物的勘というか、危険な感じがしましたので、そのベンツに注意するよう、バックミラーを頻繁に見始めました。

その交差点から、数キロ過ぎた小さな交差点で、私の後ろに停車した濃茶色アウディ(A90)の助手席から、同乗者が降りる様子を確認しました。しかし、Koronaホテルの前の交差点(UjvidékとFerenc körút)での信号待ちの際、降りた筈の同乗者(アウディ)が未だ乗っているのではないですか。しかも、その運転手は、携帯で話しており、完全に付けられていることが分かりました。この時点で、そのアウディと黒塗りのベンツの二台が、グループだと感じ、大通り(エリザベス橋経由)を抜けて帰るよう決めました。

Storob ホテルを抜け、エリザベス橋に抜けるトンネルの入り口に差し掛かる前の信号での信号待ちで、ベントツが私の前に停車し、アウディが後ろに止まりました。信号が青に変わったにも拘らず、ベントツの運転手が、自分のバッグを取りに、トラックまで降りてきたので、(通りが二車線だったので)慌てて、左車線に移り、発車しました。その際、後方のアウディの助手席に若い男が急いで戻ることを確認しました。

エリザベス橋を過ぎ、Mercurホテルに抜ける道 (Mercur Point) と鎖橋のトンネルから抜けてくる Alagut 川の交差点での信号待ちの停車中、ベントツが左側のトラムの線路に停車し、左折のウィンカーを出したの確認した直後、私の車後部から 空気の抜ける音がしました。直ぐに後ろを見ると、アウディの助手席の男が、後部 から現れ、アウディに戻ったのです。

『パンクさせられたこと』が判明しましたので、自宅、もしくは確実に警官がいる場所(自宅から五〇Mのところの某国大使公邸)まで停まらずに、走り切ることを決心しました。交差点を抜けると、アウディは、ガードを出して停車し、ベントツは、見当たらなくなりました。しかし、相手は道路事情に詳しいでしょうから、ベントツが戻ってくるのが有り得ます。私は、一番早い経路、ホテル・ブタペストの前を抜け、OMVの前を右折する道を選び、パンクを気にせず、安全な所まで走りました。自宅側に来て、ベントツが物凄いスピードで現れましたので、警官のいる所までは、行こうと決めました。幸運にも、そのベントツは、警官の所在を知っているらしく、私の入った小道 (Green) には付いてこなかったのです。そのまま自宅駐車場(ゲートはリモコンで開閉)まで入り、直ぐにゲートを閉めました。

憶測できる点

- 一 組織的な犯行(恐らく、空港から付けてきていたと思われる。)
- 二 片方に気を取らせるやり方をする(注意を逸らさせる)
- 二 外国人を対象にしている(同乗者がいない車を狙っている。)
- 三 旅行者でなく、居住者が対象(私の車は、通常のハンガリーナンバーで、外国人専用ではない。)
- 三 人通りの少ない暗い所で仕掛けてくる

- 一 パンクして走行できる距離等を把握し、目立たないように接近してくる。
- 四 警察官のいる場所を知っている。
 - 一 警官がいる通りまで追いかけてこなかった。

注意点・対策

- 一 緊急連絡先の確認
- 一 助けの求め方、避難場所等

二・走行中も、ロックすることを徹底する

… 停車中に開けられる可能性あり

三・話しかけられても、窓越しに話をする

… 催涙スプレー対策

四・パンク、衝突されても、車外に出ない

… スタンガン対策（最近、益々強力になってきている）

五・空港へは、なるべくタクシーを使用する

… タクシーであれば、襲われる可能性が非常に少ない

六・運転中（特に夜間）、周囲に注意を払う

… 意識しているかどうかで、状況への対応の速さが異なる

車を狙った強盗（事例二）

一・日時

九月一二日（水）六時四〇分頃

二・場所

M5の高速道路上、Budapestより三二Km付近、OCSAと言う町の近く

三・状況

二人組みの車が私の車の後方に猛スピード（一四〇kmぐらい）で接近し、パッシングした後、平走しながら私の車の後ろを盛んに指差し、前に割り込んで、止まるように指示してきました。私は止まるふりをし、相手が減速したところで猛スピードで逃げ切りました。

四・車

色はグレー、プレート番号はPA

F K H 274 プレートの両サイドには青色の縦のラインがあるものです。

五・犯人像

金髪の二人組み、見た目はハンガリー人でないような雰囲気がありました。

今後、この手の犯罪に対する情報交換、警察への取り締まりの強化の依頼や、対処マニュアルの作成等をおこなって協力しあうことが望まれます。宜しくお願い致します。

ピントル内務大臣への要請書

ブダペスト日本商工会幹事

宮崎 元一郎

ピントル大臣閣下

在ハンガリー日本商工会を代表しまして、大臣閣下に日本人ビジネスマンが最近遭遇した事件をご報告申し上げますとともに、私どもが考えました対応策について、日本 ハンガリー議員連盟の代表であるコーシャ議員を通して、ご提案させていただきます。

ハンガリーのテレビや新聞でも報道されているように、主として夜間に走行中の車を狙った強盗事件が頻発しています。同種の事件はブダペスト市内だけでなく、主要な高速道路においても報告されています。ブダペスト日本商工会で調べたところ、今年に入って在ハンガリー日本人ビジネスマンの何人かが、この事件に

遭遇していることが分かりました。金銭目当ての強盗だと推測しますが、何分、相手はナイフを所有していることは確実ですし、その他の凶器を所有していることが予想されます。これまでの経験から、犯人はハンガリー人でない可能性が高く、報道のようにウクライナ人や、セルビア人などの外国人が企てている場合が多いようです。

しかし、犯人の国籍を問わず、万が一、日本人ビジネスマンに事故があつた場合には、ハンガリーの治安問題が一挙に表面化することになりかねません。ブダペスト商工会としてもそのような事態を避けるために万全を尽くすことが要求されています。我々が日ごろから十分に注意を払うことは当然ですが、このような事件に遭遇した場合の対応策を検討することが必要です。

ハンガリー人と違い、外国人ビジネスマンの場合には、言葉の問題が

あり、警察への緊急連絡がうまくとれないことが多いと考えられます。ハンガリー警察の中で、外国人対応について、是非、ご検討をお願いしたいと思いますが、我々も具体的な提案を提示したいと思えます。

外人専用の緊急連絡電話の設置。
ブダペスト市内の主要なホテルおよびガソリンスタンドに、警察への協力要請と緊急通報装置の設置。

M1、M3、M5、M7の主要高速道路のパトロールの強化と、沿道のガソリンへの協力要請と緊急通報装置の設置。

これらは対応策の一つにすぎませんが、実現されれば大きな助けになると確信します。ブダペストが治安の良い街であり、ハンガリーが安心して暮らせる国であることをアピールすることはハンガリー政府にとっても重要なことと考えます。

よろしくご配慮のほど、お願いする次第です。

日本人会より

【運動会】九月九日早朝、前日の天気予報で覚悟していた事とは言え見事な雨。予定通り(！)併設体育館にて開始されました。開会式に松本大使のご挨拶を頂き、今年もヴィラーニヨシユ小学校より日本語を勉強している子供達やその家族を招待し楽しい一日となりました。怪我の功名(?)とでも言うのか、雨天のため室内で始められた競技は皆様のご協力により大変に盛り上がりました。

綱引き 一般の部では負けそうになるとつい手伝ってしまう心優しい人(?)もいたりして、担当幹事は参加者数の確認にご苦労されていました。くじ引き二人三脚では、息の合っているペアーもあれば『お引きずり』ペアーも、又、就学前児も年々増えている様でパン食い競争ではお母さんにだっこしてもらった子供が

パンを取るレースもでき、ほほえましい一面を感じました。うずまきリレー は棒を持つ場所が偏る反則が昨年より減り真剣勝負の中、棒を踏んでしまい折れると言うハプニングがあり、最後まで気が抜けない勝負となりました。新種目 もういいよ!玉落とし は楽しそうな競技で参加できなかったハンガリーの子供達がとても残念そう。競技順を入れ替え雨の上がった午後、外の広いグランドで児童・生徒のリレーが行なわれ、無事一日の競技が終わりました。

ハンガリー校の日本語学科ゲルゲイ・ユリア先生よりお礼の言葉を頂いています。「毎年ハンガリー人の子供達もこの運動会を楽しみにしています。また、父兄にとっても非常に興味深いもので全種目に参加した人もいた程。日本語に接する機会の少ない子供達にとり大変ありがたいチャンスであり、ハンガリーの

文化を通してこのような機会を増やせる様こちらの学校でも努力したいと考えています。」と、心よりの喜びの声が寄せられています。また、実況アナウンスやBGMの準備等、裏方を手伝ってくれた補習校高等部皆さんご苦労様でした。なお、今年が開会式にハンガリー国歌も取り入れたり、昨年までの「成人中距離走」を見直し児童の新競技を増やしたりとプログラム内容の更新にも努力しておりますが、皆様よりもご意見・ご希望などお寄せ頂けましたら幸甚です。

【ソフトボール&ソフトバレーボール大会】一〇月七日、多くの人の願いが天に届いたのか運動会とは一転した日差しの中、過去最高三〇〇人の参加者により開催。

前回より導入のソフトバレーボール、今回は予定の体育館がハンドボールの国際試合のため使えなくなりました事もありますが、好天の中芝生の上での競技としてみました。午後、少し風が強くなり球が流れる様になってしまいました。小学生・中学生・母子混合・ママさんチームと多彩な五チームによるリーグ戦で、楽しさの中にも真剣さが光る試合が展開されました。小学生チームは前回より成長が見られ、勝ち点は中々取れなかったものお互いに教え合ったり先生に助けってもらったりして頑張っていました。結果は三位「母子混合チーム」、「二位」ミセス・マジヤールスズキチーム、「優勝は全勝にて「ラブダチーム」(秦・池田・

渡辺・石川・坂口夫人)。

ソフトボールは一二チームにより真剣勝負。今年は佐分利翔キャプテン率いる「補習校チーム」が単独でノミネート、中学生以上の男子と先生方によるチームでお父さん達と勝負！第一回戦は一四 一八で「大使館・一般チーム」に勝ち、第二回戦「商工会Cチーム」と対戦。はじめは七 一〇と好調な滑り出しだったのですが、お父さん達の意地！の前についに一〇 一一で敗れてしまいました。三位決定戦、「伊藤忠チーム」対「商工会Bチーム」はシーズンゲームで迎えた最終回表一一 一二、一アウト満塁、逆転のチャンス。伊藤忠応援団も手を真つ赤にして声援。が、点に結びつかず残念。「商B」秦監督ニツコリ。決勝戦は連勝を狙う「住商チーム」対、豊通・江田さん率いる「商工会Cチーム」。最終回一点差まで追い上げたのですがゲーム。九 一〇にて住商連勝ならず。

江田さんのガッツポーズが印象的でした。

今大会を持ち本年度運動行事は終了致しました。運動部理事デンソーを始め幹事会社・補習校・大使館関係者のご協力に深く感謝申し上げます。ありがとうございました。

(事務局 酒井)

補習校より

作文

だいうんどうかい

一ねん はんまー たらう

一ばんきらいだったのは、ふおうく
くだんすでした。それは、すごくむずかしいからです。

一ばんすきだったのは、ばんくいき
きょうそうです。それは、はしるのが
すきだったからです。

うんどう会のこと

二年 し水 ようすけ

九月九日にうんどう会をしました。
ぼくが、ハンガリーにきてはじめて
のうんどう会です。

ぼくは、さいしよに、たんきより

そうをしました。ぼくは、まさきく
んとそうたくんとあきらくんとはし
りました。そうたくんにまけるかな
と違っていたら、かつたからうれし
かったです。

一番たのしかったのは二人三きや
くです。なぜかと言うと足をくんで
はしるのがおもしろいからです。

ざんねんだったのがリレーです。
リレーではびりだったからざんねん
でした。

三回目の運動会

三年 ブランド エリック

「バン」と、音が鳴りました。ス
タートです。あつというまに、一番
になりました。だけど、けんすけ君
がとても早かったです。けれど、ぼ
くがかつたのでうれしかったです。

たまいいは赤チームがかちました。
これは、とてもたのしかったです。

そのあとのパンくいきょうそうは、
パンをかんとんとつてゴールまで
走りました。これもとても楽しかつ
たです。

つなひきをやりました。つなひき
は、二たいりでかちました。

玉落としては、一気にぜんぶおとし
ました。赤チームがかちました。こ
れは、あまり楽しくありませんでし
た。

リレーは、まさおみ君の前を走り
ました。これもとても楽しかつたで
す。

おひるのべんとうは、とてもおい
しかったです。

赤チームは、三二〇たい一六五で
かちました。ぜんぶとても楽しかつ
たです。

雨がふった運動会

四年 岩谷 麻里

九月一日、今日は大運動会の日です。

でも、私はかぜをひいていて、おなかもいたかったので、もう行けないかと、思いました。でも、起きた時は、気持ち悪くなかったので、行けると思ったら、行けました。

タクシーで行ったら、うんてんしゅさんが、ほかの道をとおつてしまいました。でも、何とかつきましました。その時、おなか、スーと、へんかんじがしました。

最初に、走りました。走った時は、きんちょうしました。しょう子ちゃんとか、みんなにぬかされました。がんばって走ったら、二位になれました。うれしかったです。

走った後に、いろいろなものがありました。たとえば、パン食いきょうそうとか、つなひき、ときょうそ

う、ザ・リング3、玉なげ、いろいろなものをやりました。すごくおもしろかったです。

最後のリレーは外でやりました。雨がやんだからです。

お昼ご飯は、とう子ちゃんとゆりちゃんとゆかちゃんとしょう子ちゃんとりさ子ちゃんとみさきちゃんです。

私は、きゅうにおなかがいなくなったので、お母さんの所に行つて、百草がんで飲みました。すごく良かったです。

また、楽しい運動会がやりたいです。

パン食い競走

五年 吉原 翼

パン食い競走が始まった。順番が来るまでに、今年のパンはどんなのかと、よく見てみたら、な、な、なと去年のあげパンと同じみたいに見えたので、それだけでぼくはパワ―が出てきた。

去年のは、食べるとまあまあいける味だった。あのパンは、カイザーにあるのか、テスコか、それともコーラか、いったいどこに売っているのかな。あとでだれかに聞いてみようとおもっているうち、ぼくの番が来た。

思いっきり走って、気がついたら、一番だった。終わって、後で食べた。今年はチョコクリームだった。去年よりちょっと、味がおいしくなっていたのでうれしかった。来年はマクドナルドのハンバーガーだったりしたら、もっと食欲がわいて、ついで

にやる気もわいていいのにと思った。
運動会は楽しい。特にこの食べ物
競技がぼくは楽しみだ。

ところで、あのパンは、いつたい
どこに売っているんでしょうか？

運動会

五年 コズマ ロバート

昨日、運動会がありました。僕は
まだハンガリーの日本人学校で運動
会をしたことがないので、とつても
楽しみにしていました。だけど、ね
る時間がおそくてねぼうしてしま
いました。それで四〇分おくらせてしま
いました。

僕が一番楽しかったと思ったのは、
僕のグループが勝った、うずまきリ
レーでした。混合リレーで走る五〇
メートルが短すぎてつまらなかった
と思います。

僕は、パン食い競走を初めてやり

ました。おいしそうなパンに見えた
のに、食べてみたらまずいジャムが
入っていたので、妹にあげました。
僕が一番になると思っていたけれど、
ロープがゆれ、とても取りにくかつ
たから、三番になりました。来年は
もっとおいしいパンにしてほしいで
す。

最後、僕が入っていた白と青組は
銀メダルだったのでちょっとがつか
りました。だけど、運動会が楽し
かったからよろこんで帰って、六時
までに寝ました。

百倍の思い出ができた

混合リレー

六年 大河内 薫子

今回の運動会の一番の思い出は、
やはり小学部の混合リレーだった。

リレーが始まるピストルが気持ち
よく鳴った。白組が一番、そのまま

一番でいけつと私の番になるまでず
つと思っていた。どんどんスピード
を上げて白組の子は近づいてくる。
バトンが私の右手にのつたしゅん間、
私の思っていたことは、頭からピス
トルの音のように消えていった。か
みの毛が飛んでいつてしまいそうな
くらい早く走った。六番目の子が手
を出している。

私がつけるアンカーのひもを持つ
ている麻実ちゃんがいた。私は休み
の人の代わりも走らなければならな
かったので、バトンが六番目の子に
わたったあと、一目さんに、アンカ
ーがつくところにまた走っていった。
息が切れていて、もう絶対に走れな
いと思った。アンカーの位置につい
た時、もう、私の前の子がスピード
を上げて走ってきた。もうダメだ、
と思つてバトンを受け取った。

なぜかアンカーを走っていたら、
時間がとてもゆっくり流れて行くよ
うな気がした。

体がゴールテープにふれたしゅん間、とつてもうれしくて、一番だつ！と何度も思った。みんなが、

「ヤッタねっ。」

と言ってくれた。本当にうれしくてうれしくてよかったと思った。

この混合リレーは、今までの混合リレーより百倍スリルがあつて、百倍の思い出ができた。

運動会で本君に・・・

中学部 一年 室本 一樹

すずしい風の吹くFTCグラウンドの体育館。ここで運動会が行われた。

赤組の圧勝の中、みんなの楽しみにしていた百メートル走がやって来た。

僕は、優君や将太郎君と走るものだと思っていたのに、なぜか知らな

いけど、本君と神谷君といっしょに走ることになった。

「よい・・・ドン」

スタートで転びそうになったが、成功し、カーブでは一位になった。

最後の直線。本君の足音が聞こえる。

「ドン、ドン、ドン、ドン」

だめかと思つたが、ゴールにすべり込み、一位をとつた。

レースが終わり、絶対無理と思つていた本君と勝負をして、勝つた事だけでもすごかった。

そして赤組も勝利して、気持ちよく家に帰った。

れ、例外？

中学部 二年 上原 彩香

「えく！！ウソ？」

運動会、私にとってはもう、何回目になるのか。だから、だいたい何をどうやるかは、知っていた。ただ、知らないのは組分けだ。ところが、組分けは、一週間前になつてもまだ決められていない。おかしいな、と思つた。すると、「青組・上原」と黒板に！！もう、これにはすごいまげた。きつとみんなも（なんで彩香が。）って思つてたんだろう。

前夜から雨が降っていたから、おそらく明日も雨つて事は、うちの家族の中では予言されていた。その予言もビンゴでやっぱり当日は雨が降っていた。このごろ日本人会の行事では雨の日が多い気がする。きつと雨男か雨女がいるんだ、とブツブツ言いながら会場へ向かった。

もう、結構人は来ていて、やっぱ

リチビッコたちはやる気マンマンだった。(特にうちの弟、康士朗)家の中でも二週間前から、すでに運動会の話をしていたので。きつと、小一の子たちは、前日にてるてるぼうずでも、作ったのかな、などとも考えたりした。

雨も止んで、運動会も最後の競技となった「混合リレー」。私は、最後を締めくくるのに全くふさわしくない走りをしていた。なんと、トップから私だったのだ。四人しか走らないから、こんなノロイヤツを最初にしてはいけなかった。だから、もちろん、三、四位。しかも、島田先生にまでも・・。(失礼です。)自分では先生には勝てると思っていたのに、でも、先生も同じ事を思っていたみたいで(彩香ちゃんには勝てる!!)と思っただけらしい。先生にとって、彩香は『例外』だったそう。スリッパでも勝てる、言い張っていた。この島田先生のおかげで、高校生・

先生チームが一位だった。青組は、私のせいで三、四位だった。本当に申し訳ないことをした。アンカーだった、すごい足の速い本君にも、アンカーの意味のないことをさせてしまった。ごめんなさい・・・。

まあ、結果はどうであれ、無事に終わった。運動会終了後、お陽様がハッキリ見えるぐらいまでに回復した。雨男、雨女も、終わって家に帰ったからだろう。

私には今度、島田先生との一対一の対決が待っている。(先生はスリッパで!!)

随想

一九六〇年代の

ハンガリーと日本

川合 智司

何で今唐突に一九六〇年代の話なのかと疑問に思われるかもしれないが、昨年の初め頃、ほぼ毎年恒例のようになっているハンガリー訪問の際、盛田さんから、大使館（開設当初は公使館）が開設された六〇年代の頃の事を知っている人がいないので、「ドナウ通信」に何か書いてくれないかとのご依頼があり、一応承諾はしたものの、当時はまだアフリカ大陸の真中で悪戦苦闘していたため、ブダペストで盛田さんにした約束の事はすっかり忘れていた。

今年の三月に退官し、自由の身に

なり、時間的な余裕も出来たところで、これを思い出し、いささか遅ればせながら、当時の事を記してみたいと思います。大分昔の事なので若干記憶に正確でない点があるかもしれませんが、ご容赦下さい。

私は、戦後初代の外務省留学生として、六〇年八月から六四年三月まで、次いで大使館書記官として七七年一月から八一年七月まで、二回にわたり都合七年二ヶ月の間ハンガリーに勤務し、本年三月に外務省を退官するまで、カナダに在勤していた八一年八月から八四年八月までの間と八八年八月以降、チュニジア、ルクセンブルグ、ガボン、中央アフリカに勤務していた約一〇年間を除き、長い外務省生活の間、殆んどの間をハンガリーを含む東欧諸国と日本との関係に関わって来た。時には通商航海条約交渉、亡命者の受け入れ、ココム（対共産圏輸出規制）違反問題等を巡って、対立したこともあつ

たが、体制の相違にもかかわらず、両国間の関係は当初多少ギクシャクした面は否めないが、概して良好で、比較的良い環境の中で仕事が出来た様に思う。よく、「ハンガリーは好きですか？」と聞かれるが、「強い関心を持っていません」と答える事になっている。ハンガリー勤務の間は、もちろん楽しい事ばかりでなく、特に、六〇年代の頃には、若干苦い思い出がないわけではない。多感な青年時代を過ごし、その後仕事上四〇年間にわたって付き合いきた国には、単なる職業上の付き合いにとどまらず、多くの友人知人を通じた個人的な関係もあり、簡単に「好き」と言う言葉では言い表す事が出来ないものがある。アフリカにいる時でも、暇を見ては、年に一回程度の頻度でハンガリーを訪ね、長年にわたり、ハンガリー社会の変化を観察しながら、演劇、オペラ、オペレッタやコンサートを楽しんできたから、私のハン

ガリーへの感情を言い表すとしたら、一番自分の気持ちを良く言い表していると思う。

一． 外交関係が再開された頃

第二次大戦後長い間日本とハンガリーとの間の外交関係が途絶えていたが、一九五九年にプラハで、ハンガリー、ルーマニア、ブルガリアの東欧三国との間に外交関係再開に関する口上書が交換されたのを受けて、これら三国の中では、真つ先にハンガリーに在外公館を設置することが決まり、六〇年一月に、戦前最後の留学生で、私の先輩にあたる堀田磯行さんが着任し、マルギット島のグランドホテル内二階に公使館が開設された。私が外務省の戦後最初の留学生としてハンガリーに赴任したのは、その年の八月のことで、その頃には、堀田さんの他、初代小川清四郎公使及び吉岡一郎書記官が着任していた。これは全くの仮事務所で、

私が着いた八月には、公使館事務所は既に二区マルティ・ロツク通りの外交団アパートの一角に移転していた。グランドホテル内には、小川公使の仮公邸があり、一人で毎日ホテルのレストランのテーブルに日の丸の旗を立てて食事をされており、同じホテルに三カ月程住んでいる間に、公使にしばしば呼ばれて、ご馳走になったが、未だ半分学生気分が残っていたので、日の丸の旗を立てたテーブルで食事をするのは少々気が恥ずかしくて、周りの人の視線ばかり気にしていたので、正直に言っただけで、余り食べた気がしなかった。

当時はハンガリーのヴィザの入手に手間取り、赴任するのにも何かと手間暇がかかった。もともとハンガリー人へのヴィザ発給も時間がかかったからお互い様ではあったが。私の場合も、出発の大分前からヴィザの申請をしていたにもかかわらず、外交旅券を持った留学生という点が

引っかけたようで、結局出発前にはヴィザは貰えず、チャトルダイ初代公使（その後外務次官となったが、ブダペスト郊外で、趣味の軽飛行機を操縦中事故死）より、「ウイーンの大使館で間違いなく発給するので、予定どおり出発していただいで結構である」との確約を出発前に貰い、ようやく予定通り何とか出発出来たが、初めての海外勤務だったので、ウイーンでヴィザをもらうまではかなり不安な気分だった。

ブダペストに着いてからも大変だった。外交官として登録していながら、留学生と言う事で公使館へも行かず、ふらふら国内を歩き回っていたので、疑いの目を向けられ、留学、在勤期間を通じて、尾行や電話の盗聴を受けたり、友人が警察に呼び出されたり、余り愉快でない経験を結構させられた。こんなこともあって、当時ハンガリーに対しては、どうしても良い感情を持つ事が出来ず、何かと批判ばかりしていた為、ハンガリー側からも余り良い目でみられていなかったようだ。

二・着任当時のこと

当時の赴任ルートは、アンカレッジ、コペンハーゲン経由で、ウィーンに着いたのは、出発から約三六時間後だから、殆ど丸一日半を今のジャンボとは比較にならないくらい狭い、プロペラ機ダグラスDC-6の機内で過ごしたわけで、旅行そのも

のも相当苦痛だった。ようやくブダペストに着いた時には、疲労困憊しており、本当に遠くへ来た事を実感していたので、何年後かにここから無事に生きて日本に帰れるのだろうかとか心配になる位だった。六〇年と言うと世界を震撼させた五六年のハンガリー動乱から四年しか経っておらず、東西間の交流も活発でなく、ウィーンからブダペスト経由イスタンブール行きのおーストリア航空のフライトは、乗客より乗員の方が多く、機内はガラガラで、夕闇のブダペスト空港で降りたのは私一人。スチューワーデスから、「ハンガリーは怖い所だから、気を付けてね」との励ましの言葉を背に受けて、タラップを降りた所で国境警備隊に、パスポートを取り上げられ、左右両方からしばらく懐中電灯を向けられたのにびっくり。空港もひどく暗く、辛うじて「BUDDAPEST」のサインが読み取れる以外は、懐中電灯

による目潰しの効果もあって、殆ど何も見えず。出迎えの吉岡書記官の車で、宿舎のグランドホテルに向かったが、当時の町中はひどく暗く、宿舎への途中明るく、光るものと言えば、中心部の党機関紙、コルヴィン百貨店と西駅前にあつた国营保険会社のネオン位で、道路の照明も申し訳程度にぼつぼつとあつただけだった。動乱で市内の主要個所が滅茶苦茶に破壊されてからいくらかもたつていなかったので、ある程度覚悟はしていたが、暗いブダペストのたまたまいと歩いている人のひどくみずぼらしい格好を見て、当時ハンガリー人が置かれていた苦境に同情すると共に、これから過ごすことでの生活の将来に早くも大きな不安を覚えた。

留学期間は二年間の予定だったが、結局、最後まで大学入学は認められず、これは留学ではなく、遊学であると自嘲していた。その上、一般八

ンガリー人と西側諸国人との交流を病的に嫌っていた当時の政府は、公使館を通じて、頼んでいた家庭教師は紹介してくれず、ハンガリー人家庭での下宿先の紹介には三ヶ月もかかった上に、あからさまに外国人がハンガリー人家庭に住み込む事は通常許されないが、日本との友好関係にかんがみ例外的に認めると恩を売られる始末。この「友好関係に鑑み」との表現は、当時の共産政権からこのような恩着せがましい場面でしばしば聞かされた。

希望に燃えて始めたハンガリー生活ではあったが、楽しい事は余りなかった。因みに、当時は日本人を含む西側の人は、勝手に事務所や住宅を探したり、人を雇ったりする事は許されず、全て外務省の外交団サービ局を通して行う事とされていたが、官僚的で、働く意欲は全く感じられず、西側外交団から、ノン・サービ局と呼ばれ、評判は最低であった。

という訳で、ハンガリー語とハンガリー文化の勉強は、結局独学に終始した。といえれば聞こえは良いが、要するに暇に任せて遊んでいただけ。成果は、ハンガリー国内を隅から隅まで列車、バスで、殆ど行ったことがない村が無いくらい旅行した位。広大な大平原、メチエツクやバコニの穏やかな風景や日本人に友好的な多くのハンガリー人の親切は、政府の数々の嫌がらせでもすると反ハンガリー的になりがちであった私のハンガリー観を修正する役割を果たしてくれた。何人かの友人も出来たが、日本人の友達がいると分かる警察による嫌がらせを受けると、二三次会つと、ほとんど例外なく先方からこれ以上会いたくないと断られた。ケチュケメートでは何も知らずに、旧ソ連軍の基地の近くでとつた写真を秘密警察に没収され、数時間足止めされると言う事件にあり、公使館を通じ、写真の返却と不当な

取り扱いに対し陳謝をを要求したが、三カ月後位に外務省から返ってきた返事は、「そのような事実はなく、このような非友好的な要求は、両国関係増進に貢献するものではない」というもので、写真は結局戻ってこなかったし、陳謝どころか、「いいかげんな事を云うと承知しないぞ」とばかり門前払いを食ってしまった。当時は東西対立のさなかにあつて、こんな事件が絶えず、米英独などの外交官が頻繁に国外に追放されていた。郵便物の開封、電報局を通じて送られてきた電報類がずたずたに切られていたり、大使館の事務所に盗聴マイクが埋めこめれる事件もあつて、両国間の関係は、とかくギクシヤクする事が多かった。

そんな中で、唯一の楽しみは、コンサート、オペラ、演劇に通う事であった。チケットは驚くほど安く、三〇フオリント（約一ドル）も出せば、一番いい席でオペラが見られる

ので、エルケル劇場とオペラ座には随分通ったし、ハンガリー語の勉強のため、カトナ、マダーチ、国立劇場（当時はラーコーツイ通りとレーン通りの角にあった）にも時々行つたけど、さつぱり分ならず、不勉強を恥じるのに役立っただけであつた。もちろん今日のようにオペラ座やコンサートホールで日本人に会うことは全くなかつたが、じろじろ見られては、キーナイ、キーナイと皆から言われるのには閉口した。

三・当時の公使館と在留邦人

六〇年一月に戦前最後の外務省留學生堀田磯行書記官が、戦後初のわが国外交官として着任、公使館仮事務所をマルギット島のグランドホテル二階に開設、すぐ二区のマルティロツク通りに移転したが、アパートで事務所向きではなかつた為、一年ほどいただけで、同じく二区のローメル フローリシユの現EU代表部建物に移転した。公使は、長い間、二区のヴェールハロム広場に通じるアーフォニヤ通りの奥（現ノールウエー公邸？）にあり、現在の公邸に移る前は、二区のボガール通りにあつた。

初代公使は、小川清四郎公使。フランスで研修をし、主に仏語圏の勤務が長く、外国語と言えばドイツ語が主流のハンガリーでは結構苦労されていた。ヴァチカン大使を最後に引退後、長年輸銀監事として活躍した。六二年八月に小生が勤務を始めた。

た直後に公使は吉田健一郎公使に代わっており、吉田公使の時代に、東欧圏とイスラエルなど数力国しか残つていなかった公使レベルの外交関係を全て大使レベルにするとの本省の方針に基づいて、ハンガリーとの関係も大使レベルに引き上げられた。次席は、吉岡一郎一等書記官。本省では北東アジア課長として韓国、北朝鮮関係を担当した後、バングラデツシユ、チェコスロヴァキア大使を歴任。穏やかな、大変社交的な人で、外交団の人氣が高かつた。いずれも鬼籍に入られたこれらの方々について、六三年にはロシア語の専門の岩崎剛書記官が着任して通商、広報関係を担当していた。館員は、公使以下私までいれて総勢五人の小公館で、当時はこの程度の大きさの大使館は少なくなかつた。この体制は、海外旅行の自由化による、渡航者と海外在住の邦人数が飛躍的に増え出した七〇年代のはじめ頃まで続いた。

最初の在勤の頃には、両国間には文化協力協定もなく、国費留学生もおらず、当時唯一の在留邦人として、評論家兼歴史学者で、当時左翼の学生、知識人に人気の高かった羽仁五郎氏の娘さんである羽仁協子さんが、音楽教育法コグーイシステム研究の傍ら、大学で日本語の講師をしておられた。公使館関係者として、小川公使の料理人として山内さんが、後任の吉田大使の料理人として加藤能巳夫妻がいた。夫人が日本人として戦後初めてハンガリーで出産されたが、妊娠中の医者診察に通訳として立ち合わされて本当に困った思い出がある。山内さんは長い間伊豆長岡で旅館の料理長をしていた。加藤さんは湯河原で旅館一元荘を営んでおり、行けばハンガリー料理を出してくれたが、このところもう何年もお邪魔していないのでどうであるか。公使館がローメル フローリッシュに移ってから間もなく、公使館

の警備員として、法務省大村収容所勤務を最後に退官した名前も、顔もいかつい梶原軍三さんが着任されたが、警備員と言う仕事柄と言葉も分からなかったせいもあって、余り外出もせず、館内でじっと耐えておられた。

両国間の交流も活発ではなく、私の在勤した四年間に、閣僚等の政府要人の往来は全くなく、往来したのは商社関係の人が殆んどで、それたまに來る程度で、街中で日本人に会うことは年に一回か二回という位極めて稀であった。偶然に街中で会えば、全く見知らぬもの同士でも、お互いに黙って通り過ぎるということとはなく、挨拶を交わし、予定を調整し合っては、一緒に食事したりするのが普通であり、密かな楽しみの一つでもあった。数少ない来訪者の中で、印象に残っているのは、オリンピック終了後、帰国の途次立ち寄った、山中毅、田中聡子の両メダリスト以下のローマオリンピックの水泳選手団。当時の日本水泳チームは結構強くて、応援のし甲斐があったが、水球だけは殆んど全く歯が立たなかった。この対抗試合をスタンドで観戦していた数少ない日本人の中に、後にヴェトナムで行方不明に

なつた辻政信参議院議員と数名の全学連の闘士がいた。「共産主義の現実を彼らに見せて、改宗させてやる」と言つて、水泳はそつちのけで共産主義論争をしていた姿が印象に残つている。そのほかには、ハンガリー側の招待で来訪した労働組合等左翼系の人たちが、結構いたようだが、彼等はハンガリー側全額負担の賓客で政府や党の施設に泊まり、歓待を受け、帰国後発表する共産主義を礼賛する記事を見て来訪した事を知る程度で、偶然にばつたり出会う事は殆んど無かつた。

東京オリンピックの前年には、釜本、杉山以下の全日本サッカーチームが、強化策の一環として、欧州転戦の途次来訪したが、当時のハンガリーには、アルベルト、ゴロチ、テイチ等のスタープレイヤーがいて、ワールドカップの常連であつたハンガリーの一部チームには相手にされず、ケチケメートの二部のチーム

と対戦し、確か八・五の野球のようなスコアでようやく勝つたように記憶している。

四・当時の暮らし振り

当時の町が相当暗かつた事は既に述べたとおりであるが、街灯も少なく、照明が暗かつた事もあるが、中心部にある商店の中の照明もひどく暗く、じつと覗き込まなければ何を売っている店か分からない位だつた。その上、どの店も店の中には皆が捜し求める商品はなく、あるのは誰も買わないものばかり。「シャイノシユ ニンチュ」と言う言葉は何回も聞かされたのですぐ覚えた。何かが近く売りに出されるらしいと言つたわさが流れると、たちまち商店の前に長い行列ができ、人々は時には何時間も待たされることがあつた。トイレットペーパーのようなものまで、しばらくどこにも売っていないと言ふ事もあつたりして、そう云う噂に

無関心では必要なものを手に入れるのは難しい状況であつた。

郵便は、怠慢なのか意図的なのか、ひどく遅れて着いたり、或いは着かない事もよくあつた。当時の館員は生活必需品の購入の為ウイーンへ行く機会を利用して、公用、私用を問わず郵便物の発送、受け取りをウイーンで行つていた。当時は、オーブダのビーチ通りからドログ、コマールム、ジュールとドナウ川沿いに行く国道一号线を使つていたが、交通量が少なかつたので、三時間半位しかかからなかつた。余りに頻繁に通うので、国境警備隊員とすつかり顔なじみになつてしまつた。コカコーラ、バナナ、オレンジ等当時のハンガリーではクリスマスの直前にちよつと出て、春の淡雪のようにすぐ消えてしまうような貴重品を人通りの多いアパートの前で降ろす時が大変で、いつも見せてはいけないものを見せびらかしているような後ろめた

さを覚えたものである。コカコーラを見た事もないハンガリー人から、「ツォツァ ツォーラ」でどんなものだ? とよく聞かれた。もつとも当時は日本でも売られていなかったから、偶に接待した日本人からも珍しがられたが。

マルティエーロツクの外交団アパートの単身者用アパートに五〇ドルも払わされたのは痛かったが、公共料金、食料品、劇場、スタジアムの入場料は非常に安く、バス、電車一フオリント五〇フイレル払えば市内何処へでも行けた。レストランも安かったので、独身者でも困る事は無く、若造の分際でグンデル、ゲレールト、キシユ ロイヤル等の当時の一流レストランでも時々食事を楽しむ事が出来た。東京にいた時には、新宿の汚い「ドブ板横丁」でラーメンをすすするような生活をしていた私にとつては、こんな良いレストランで肉をふんだんに使ったハンガリー

料理を味わえる幸運を噛み締めていたが、冬場の観光客が少ない時には、客は私一人だけと言う事もしばしばあった。一人だけでジプシー音楽を聴きながらする食事と言うのも面白いものである。

車は極端に少なく、ワーツィウツァでも何処でも殆んど何処へでも自由に駐車出来たが、フォルクスワーゲンのような大衆車でも当時のハンガリー人には珍しがられ、駐車していると良く人垣が出来たのには閉口した。車への関心は高く、ソ連製や東独製の車を買うのに、頭金を払ってから三年も待たなければ手に入らなかった。したがって中古車が異常に高く、ハンガリー人にとつては、三年かかっても四年かかっても、新車を手に入れるのが何より一番いい投資だった。

ハンガリー天才列伝

ジョージ・ソロス

(シヨロシュ・ジョルジュ)

一九三〇年

マルクス・ジョルジュ著

生い立ち

かつてデニス・ガポールはこう言った。「戦争の道義性だけでなく、株式ゲームの道義性を見つける必要がある」。ジョージ・ソロスはこれを見つけてくれた。一九九二年九月には英国経済の状況に比べて割高にあったイギリス・ポンドを売り浴びせることで、一〇億ドルを儲けた。それから、一九九四年二月には、日本円に狙いを定めて、今度は一日に六億ドルを損した。彼は今、東欧と第三

世界の閉ざされた社会を開くために、一〇億ドル以上注ぎ込んでいる。彼は自らの本能と理解力で、西側の政府支援より成功しているといえるだろう。その行動の秘密に迫るには、ソロスのサバイバル・ゲームを知る必要がある。

彼の父シヨロシュ・ティヴァダーは野心的な青年だった。第一次世界大戦に志願し、中尉まで昇進した。しかし、戦争捕虜となり、シベリアへ送られた。捕虜収容所で彼は長板(*The Plank*)と呼ばれた、板に釘付けした雑誌を編集して人望を得、捕虜の代表者になった。ところが、隣の収容所から数名の捕虜が逃走し、ロシア人は見せしめに、捕虜の代表者を銃撃した。これでシヨロシュは収容所を抜け出すことを決心した。ハンガリー人の逃亡グループは筏を組み、河を下って海に出ることを考えた。しかし、すぐにこの計画には重大な欠陥があることが明らかにな

った。シベリアの河は北極海に向かって北に流れるのだ。これで長い歳月にわたる野宿生活に入るようになった。一九二〇年にハンガリーに戻るまで、戦争に耐え、一九一七年のロシア革命を生き延びなければならなかった。

「これが父を造り上げた発達形成の経験で、その父が私を造り上げたのです」と、ジョージ・ソロスは語る。

ブダペストの青年シヨロシュ・ジョルジュは何時間も窓際に座り、ダニュープの流れを眺めるのが好きだった。父シヨロシュ・ティヴァダーは裕福な弁護士で、熱心なエスペランティストだった。父は息子のジョルジュに、「資本は資本(頭)の中に仕舞って運べ」「資本」はラテン語で頭という意味」と教えた。これは実際にそうだった。第二次世界大戦でドイツがハンガリーを占領した時(一九四四年)、ジョルジュは一四

歳だった。父は偽の証明書を作って、ある政府の高官がジョルジュの名づけ親になるように手配した。その高官にはユダヤ人の妻がいて、父がその隠れ家の面倒を見ていた。「だから、これはビジネス取引そのものだった」とジョージ・ソロスは著している。「名づけ親」が国中を回り、ユダヤ人の財産を没収し、収容所へ送る指揮をとっている間、付き添い少年は何人かの犠牲者に、前もって追放リストに掲載されていることを警告して回った。

「法律に従順であることは自ら命を縮めるものだ。いかにそれを掻い潜るか、それが生きる術だ」と、青年ソロスは結論を出した。「一四歳にもなっていれば、本当に傷つくことはない。これはスリルに満ちた冒険で、ある意味で僕の人生の中で一番幸せな時間だった。それには発達形成の効果があつた。僕には発達形から、生きる術を学んでいた。危険は嫌いだ。それを避けたい。だから、そこから僕の知恵が出てくる」。世界大戦後のハンガリーは居心地が悪かった。エスペラント国際会議の名目でハンガリーを離れスイスに向かい（一九四七年）、そこから英国に渡った。

「私の臨機応変の樂觀主義は一九四五年のハンガリーで頂点に達していました。それからの英国は私にとって最大の落ち込みでした。両親や友人から切り離され、自分が大切だという感覚を失ったのです。ハンガ

リーではいろいろな冒険を潜り抜け、そうして生き抜いてきたことで、自分は大切だという感覚を持つことができました。そうやって人々の関心を惹くことができたと思つたのです。ところが英国では誰も僕のことを気にかけてくれません。それは幻想を失うような悲しみでした」。

ロンドンからニューヨークへ

ソロスはウエイターをしてお金を稼ぎ、ロンドン経済大学に入り、二年で卒業した（一九五二年）。すぐに博士号取得のため、哲学論文 *The Burden of Consciousness* を書き始めた。指導教授にはカール・ポパーを選び、草稿を読んでもらった。ポパーがこの論文を気に入り、面会できることになった。ソロスが自己紹介した時、ポパーは彼を一瞥してこう言った。

「なーんだ、君はアメリカ人じゃないのか。これはまったく失望した。

その理由を話してやる。君の論文をもらった時に、漸くアメリカ人も開放社会と閉鎖社会にかんする僕の持論が理解できたのかと思っただ。つまり、僕のアイデアを伝えることができたと思っただ。君はその二つ社会の中で生き長らえてきた訳だから、それは君にとって自明なことだ。だから失望したんだよ」。

ロンドンではセールスと裁定取引に従事して、お金を稼いだ。一九五六年には家族と一緒にすることができ、アメリカへの渡航ビザを申請した。しかし、「彼は若すぎて（二六歳）、アメリカが緊急に必要としているサービスを提供できるスペシャリストではない」という理由で、ビザ発給は拒否された。アメリカ大使館に影響のある友人が掛け合い、「裁定取引というのは、若死にする仕事だから、若くしなければならぬのだ」と説明したお陰で、ビザが発給された。こうして、一九五六年、

ソロスがアメリカに渡った。

変化の予兆を感じ取る彼の本能は、株式市場でも遺憾なく発揮された。彼の国際的経験から、アメリカ国内の市場格差より、世界の市場間格差が大きいことに気づいた。だから、資金をニューヨークやロンドン、東京の間で動かすことで、より大きな利益を上げることができる。一九七九年、ソロス・ファンドは、クウォンタム・ファンドと改名された。

「第二次世界大戦は僕の傷つき易い年頃のいわば上級コースだった。それから四半世紀後に造られたクウォンタム・ファンドは青年時代に学んだ技術を重用するものだった。クウォンタムの命名はファンド規模の飛躍的な増加を祝うものだったが、もちろん量子力学の不確定性原理を意識したものだった。

僕が思うに、考えるプレイヤーと
いうのは、自らが行為者の一人である
状況を理解するという非常に難し

い立場にある。ふつう、理解するというのは受動的な行為で、プレイヤーというのは能動的な行為だと考える。実際には、これらの二つの行為は相互に干渉し合っており、プレイヤーが純粹理論や完全知識にもとづいて決断することを不可能にしている。これが一種の不確定性を生むわけだ。

事実と思考とが独立なものでないことは、科学においても見られるところだ。その最適な事例がハイゼンベルクの不確定性関係だ。つまり、観察行為が観察現象に影響しうる。だから、科学者は対象を乱さないように努める。他方、金融におけるプレーヤーの最終目標は、自分の利益になるように現実を造りあげることだ。だから、事実と行動を並存的に捉える仮説は、間違っている」。
とはいえ、ソロスは実際の取引では、科学的手法に依拠しているように見える。つまり、ドグマに頼るのではなく、「僕は常に仮説を立てる。予期される一連の事象について、ある判断を立て、実際に生起する事象と僕の判断を比較する。これが僕の判断を評価する基準を与えてくれる」。クウォンタム・ファンドは過去二六年を通して、二年ごとにその資産額を倍増してきた。一九八〇年代だけを取ると、資産額は三〇〇倍

に増加している。*Financial World* は、もっとも成功したビジネスマンとして、一九九二年と一九九三年の両年にソロスを選んだ。実に、ソロスは毎分八千ドルを稼いでいたのである。

マイケル・ポラーニイは、科学においてすら、公平な客観性への信頼は間違っているという。ソロスはまた、経済学が一九世紀の物理学を模倣していることを批判する。彼が強調するのは、事実が我々の思考に影響を及ぼすだけでなく、人々の考えや目的が市場に影響することである。彼はこの相互作用を「反射性」(reflectivity)と呼んでいる。彼がこの言葉を好むのは、アインシュタインをとくに尊敬しており、相対性(relativity)と音韻が類似しているからである。
「反射性の理論は我々が生きていく世界を理解するのに、大きく貢献すると思う。反射性は、緊張が何か

を勃発させる水準まで到達していることを知ることにある。たとえば、ブームが爆発寸前にある、閉鎖社会が反乱勃発の寸前にあるという状況の判断である。まさにその時こそ、予期されぬことが予期され得る。そして、私は他の人より、少しだけ上手にこれを予期することができる」。

哲学者ソロス

ソロスは自分自身をビジネスマンというより、哲学者であると見なしている。それはますます真実味を帯びている。歴史の解釈や歴史を創ることについて、ソロスはこう語っている。

「私の哲学では、我々は不完全な理解にもとづいて行動しているという認識が、開放社会の基礎になっている。究極の真理を有するものは誰もいない。したがって、我々には批判的思考モードが必要になる。つまり、平和と一緒に生きるための制度や利害が必要だし、権力の秩序ある移行を保障する民主的な政府形態が必要だし、フィードバックを与え、誤りの修正を許容するような市場経済が必要だし、少数者を保護し、少数意見を尊重することが必要だ。

我々は誤りを犯しやすい存在だという思考は、すでに生得権のよ

うに開放社会の利益を享受している人々には、自然に受け止めてもらえない。それが問題なのだ。英国で議論している時にそうだった。ある人が、自分が開放社会に生きているなど考えても見たことがないと言ったのだ。これが開放社会の欠陥だ。閉鎖社会の抑圧を経験した人々だけが、私と見解を共にする。自由は空気のようなものだ。人はそれを当たり前のことと思っている。しかし、別様に見れば、空気とはまったく違う。もし守ることができなければ、それを失ってしまうものなのだ」。ロンドンの街を歩いている時に、突然、胸を打たれた。ソロスは心臓発作に見舞われたのかと思った。幸いにもそうではなかったが、しかし「その時、僕は自問した。もう良いじゃないか。自分のためには十分すぎるほどのお金を稼いだじゃないか」。

その時から、ソロスは何がしかの資金を慈善活動に割くことに決めた。

一九七九年に Open Society Foundation（開放社会財団）を創設した。「我々が生きている世界は本質的に不完全であるという理解から、僕の考えは出発している。我々が脆弱であるという認識と閉鎖社会を拒否することで、開放社会が基礎付けられなければならない。もし我々が本当に脆弱であるなら、考える自由も選択する自由もない閉鎖社会より、開放社会が望ましいのだ」。

この財団はフォード財団より多くの資金を慈善事業に使っている。すでに二五カ国に財団事務所が開設されている。ハンガリー（一九八四年）、中国（一九八六年）、ロシア（一九八七年）、ポーランド（一九八八年）、ブルガリア・エストニア・リトアニア・ルーマニア・ウクライナ（一九九〇年）、ユーゴスラビア（一九九一年）、アルバニア・ベラルーシ・ボスニア・チェコ・ラトビア・マケドニア・モルダビア・スロベニア・スロバキア（一九九二年）、カザフスタン・キリギスタン・南アフリカ（一九九三年）、グルジア（一九九四年）、ハイチ（一九九五年）。一九八九年一年だけで、財団は東欧諸国の開放社会への平和的移行のために一〇億ドルの資金を使った。

ソロス財団

祖国ハンガリーでソロスは友好的に受け入れられた。すでに一九八〇年代に経済改革を進めていた共産主義政府は、一九八四年にソロス財団（*Soros Foundation*）を設立するのに協力した。以後、毎年三〇〇万ドルの支援を受けている。今日でもソロスはハンガリーで歓迎されており、国家勲章も授与された。ブダペストには中欧大学（*Central European University*、大学院大学）が創設され、東欧諸国から社会科学系の学生を受け入れ、英語で講義をおこなっている。

プラハでは開放社会財団が「憲章七七」の人々を支援し、ポーランドでは「連帯」を支援した。優れたロシアの学校を存続するために国際教育財団が二億五千万ドルを支援し、ロシアの科学エリートを支援するために国際科学財団が一億ドルを支援した。これによって、三万人のロシ

アの科学者が五〇〇ドルの緊急支援を受けたのである。アンドレイ・サハロフに代表されるように、ソ連の知的エリートたちはロシア社会の開放の先頭に立つ人々である。しかし、ソロスは支援金の一部がスイスの銀行口座に移され、贅沢な乗用車に化けたのに驚いた。こういうことがあって、ロシアの財団は三度も組織し直された。

もう一つの大きな事業はウクライナの経済改革であった。彼の経済顧問チームが新政府に協力した。ソロシアはロシア帝国主義の復活を阻止するために、ウクライナの復興がきわめて重要な意味を持つと考えたのである。しかし、こうした中で彼は常に不満を抱えていた。「ベルリンの壁崩壊とソ連の崩壊によってもたらされた革命的な動きを掌握するのに、アメリカは失敗した。アメリカはもつと資金を注ぎ込んで、旧専制主義諸国の民主化への胎動を支援すべき

だったと考える。ユーゴスラビアのジェノサイドでもまた、アメリカは鈍い対応を見せた」。

ユーゴスラビア解体後に、ソロスは多民族の小国マケドニアを支援した。マケドニア大統領のヴラジミール・メルツィンは、「ソロスが我が国にたいして行ったことを過大評価する訳ではないが、彼は我が国を救ったと思う」と話している。

確かに、ソロスには中欧を良く知っているという強みがあった。一九四〇年代初頭と一九九〇年代初頭の二度にわたって、反ユダヤ主義の攻撃に曝されている。ヨーロッパのジブシーのためにロマ財団を設立し、南アフリカの黒人学生に奨学金を提供し、チエチエンの学校の再建を助けている。

「我々の文化を前提とすれば、ユダヤ人であることは明らかに汚点であり、不利なハンディキャップである。だから、それを超越したい、逃

れたいという願望があった。しかし、ハンガリーの同化ユダヤ人は深い劣等感を持ってきたし、私がそれを乗り越えるのに長い時間が必要だった。もちろん、普遍的なアイディアに自分のすべての関心を向けることが、特殊なものから逃避する定石の手段だと言えるだろう。私はまさに、開放社会という普遍的な概念を信奉することで、それを行っているのだと思う。別言すれば、人が部族のように振舞っている限り、反ユダヤ主義は永遠に克服できないと思う。人が部族主義を放棄して初めて、それを克服できるのだと思う」。

The New York Times は異例の七段抜きで、ソロスがアメリカ社会を救うチャリティに戻ると宣言したことを報じた。というのは、「保守派が市民への国家的義務を放棄し、市場価値と極端な個人主義を医療や法律、ジャーナリズムや政治に浸透させ、それらを天職よりもビジネスと

して利用しようとしているからであつた」。彼は三年にわたって千二百万ドルを *Algebra Project* に提供して、アメリカ全土の公立学校における数学教育技術改善の試みを支援した。

編集室より

前号の松本大使の名前に誤字がありました。ここに訂正し、お詫びいたします。正しくは、松本和朗です。

次号の締め切りは、十二月中旬とさせていただきます。

TEL/FAX: 356-5721

e-mail: y-sakai@mail.matav.hu

電話・FAXが変わりましたので、ご注意ください。

ソロスはまだ、東欧やアメリカに見られる自由市場の弊害を目の当たりにして、彼のアイデアを再考している。

「以前には、一方に開放社会があり、他方に閉鎖社会があり、この二重性が世界を特徴付けていると見ていました。今、この見解を変えつつあります。開放社会が中心にあり、過激主義がこれを脅かしているのです。一つの過激主義は全体主義的思想で、共産主義、ファシズム、民族主義などがそれです。もう一つの危険は、驚くなかれ、レッセフェールです。この種の経済自由主義は市場の完全さを擁護し、国家による介入を排除します。市場は不可欠なものです。その力に制限を加える必要がありません。社会の存続はある種の結合を必要とします。今、個人的利益や競争が強調されすぎ、協力は無視されています。だから、一定の問題は政治的な手段によって解決され

なければなりません。私はビジネスから離れている時間は、この問題を今まで以上に考えています」。

一九九七年初頭、ソロスの論文がスウェーデンの新聞 *Dagens Nyheter* に掲載された。

「私が国際金融市場で財を築いたことは事実です。しかし、我々の時代の自由主義資本主義や市場価値体系のルールが、我々の民主主義や開放社会の未来を脅かしているように思うのです」。

「僕は安定とカオスの境で生きるのが好きだ。それが本当の生き方を与えてくれるからだ。でも、破壊的な不安定性は怖い。もし僕が収容所に送られていたとしたら、僕の青年時代はもつと冒険的なものになっていただろうが、でも生き長らえて、僕は幸せだった。僕の本当の情熱というのは、境界領域を見つけることにあり、そこに留まることなのだ。僕の究極的な目標はソ連システムの

崩壊のような革命的なプロセスを遅めることだ。政治であれ株式市場であれ、崩壊は困る。崩壊よりも、進歩を支持したいのだ」。

訳者からのお知らせ

ここに連載してきましたハンガリー天才伝が、十二月に日本評論社より出版されます。これまで紹介してきた七名のほか、十三名の科学者を含めた二名のハンガリー人の伝記を中心とするものです。邦訳の題名は、『異星人伝説』です。

ハンガリー在住の「ドナウ通信」読者の方でご希望の方に、贈呈いたします。ただし、送料だけはご負担ください。

ご希望の方は、送付先（日本の住所に限定させていただきます）を次のメールアドレスに、お知らせください。

morita@tateyama.hu

編集室より

前号の松本大使の名前に誤字がありました。ここに訂正し、お詫びいたします。正しくは、松本和朗です。

次号の締め切りは、十二月中旬とさせていただきます。

TEL/FAX: 356-5721

e-mail:y-sakai@mail.matav.hu
電話・FAXが変わりましたので、
ご注意ください。